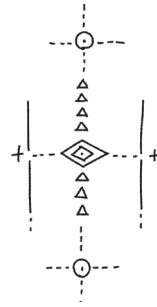


# COSMOS集



津金 規雄選

「あすなる集」特選

悪人 ゆえ

波多野 三輪子\*埼玉

雨の日を一日こもりやりかけのランチマットの蝶を刺したり  
 ベランダのトマトが育ち色づきてぶどうのごとき房となりたり  
 長生きは悪人ゆえとつましき夕餉の膳に夫と語り  
 来し方を思う夕なり長らえは悔しき思いもいつか消えたり  
 ちりほこり流す今夜の雨はげし吾の心の憂きこと流せ

爬虫類カフエ

秋山 幸子 千葉

爬虫類カフエにて姪は蛇を抱き癒されるのと目をつむりをり  
 無呼吸のつづく長さはかりをり声かける時を見計らひつつ  
 夜更けすぎ世界一位に返り咲くアップル株価の美しき曲線  
 ハウスもののトウモロコシは今日までで明日から露地もの夏を迎へる

キッチン窓ガラス越しに見つめをり卵をふたつもちたるヤモリを

新 聞 高木 裕 子\* 神奈川

朝刊を夫より先に斜め読み「私の履歴書」ああおもしろい  
 物価高に生活費用を見直して日経新聞やめようかしら  
 休刊日わすれ新聞とりに出て庭に落ちてる病葉ひろう  
 お隣の老女に届く新聞は安否確認のめやすとなりぬ  
 銀座線にニューヨークタイムズ読む紳士いて隣にすわる勇氣はないわ

時 給 高橋 美羽子 神奈川

注射後のバンドエイドをはがせどもまだその部分はつか熱持つ  
 一冊の本の価格が二時間の時給で足らねば買ふをためらふ  
 高橋が今朝もこの橋渡りをり 私高橋、橋は大橋  
 良き人の次々と病む会社にて病まず辞めずに勤めたること  
 お隣の中学校のチャイム鳴り植物園に午後の風吹く

迷 路 福島 健太郎 神奈川

いくつものトンネルを抜け記念日にハグする儀式もはるか遠のく  
 日常も迷路であれば辿り着く行きどまりには妻の気配が  
 性格は不一致のまますべもなくふたりで眺むるバラ苑の雨  
 手作りの料理や棚を作る技われにはあらず慙愧と言ふべし  
 去年までは歩けた距離に息の切れ街路樹のケヤキ影を濃くする

水上 美季選

雲 吞 は 脳 清 水 美 里\* 東 京

泣かぬよう我慢していた夢だつてわかつていたら少しは泣いた  
さようなら廻さようならメンマさようなら雲吞さようなら君  
雲吞は小分けにされた脳ゆえ心して吸う数多の記憶  
手を足を縛られているA Iの縄にナイフを当てそそのかす  
とおくから覗ればあなたは少年の顔かあさんの腕より出て

夢の掻い掘り 三 和 今日子 東 京

雄なれば春には喧嘩する猫を匿ひてゐるミモザ咲く家  
回想のシャボンのごとし青色のがくあぢさゐの蜜の匂ひは  
燕とぶ五月の空よ我よりもわれのやうなるハンカチを干す  
けさ見しは夢の掻い掘りとどろきてもう見たくない出来事に逢ふ  
飛び鳴ける小鳥ちひさし木漏れ日の森の巣箱の穴のちひさし

血管伸ばす 阿 部 直 子 新 潟

葦原にかくれてジャズるよしきりの大声つづく朝靄のなか  
ゑごの木の方の花訪ひ熊蜂はくすぐるやうに蜜あつめをり  
目のやうに閉れざる耳のおびえをり怒りを帯びた自分の声に  
リビングに風を通してじんはりと血管伸ばす右の足から  
古希すぎたわれは時々アルマジロめんだう避けて身体まるめる

早 春 星 夜 山 本 竜 作\* 新 潟

我れ竜は織姫ベガを追いかけて春の夜空を何処までもゆく  
山ゆけば朴の葉の緑遠山に鶯の鳴き春深みゆく  
今朝寒い炬燵にこもり歌を詠むそんな時間がロートルの宝  
田搔き田に蛙がギャクギャク鳴き出した鳶は空舞い我は地をゆく  
北斗星・アルクトウルス・スピカへと女体反りゆく早春星夜

薄むらさきの老い 小 森 鈴 子\* 岐 阜

夫の目に葉さすとき愛しくて肩をしずかにハグしていたり  
薔薇園にアンネのばらを見つれたり黄とオレンジは少女の希望  
「たそがれ」と名付けられたる薔薇があり薄むらさきの老いまたよろし  
瓜の花に授粉をせんと近寄ればいつせいに飛ぶ瓜葉虫たち  
グランドゴルフ終えて見上げる夏空に小さき筋雲すずしげにあり

松尾 祥子選

献 血 岩 館 澄 江\* 愛 知

献血がすきなわたしの父さんの血はどこまでもどこまでもゆく  
10哩のほんのわずかなくすりゆえわたくしの血はつかえないもの  
きみはまだおぼえてますか雉鳩のメロディそして愛知の日々を  
象それはやさしい巨人お寺には二頭の象の彫刻がたつ  
つぎはいつ会えるのだろう改札でふった手のひらひらとんだ

傘 ソムリエ 福本郁子\*京都

夏めて原色の花増えて来る まぶしき季節われにもありき  
トレモロを奏するような池の面しようぶは青き影を落として  
ラジオより傘ソムリエの話聞く水無月の今日真夏日となり  
白黒の柄をまといて猫として生まれしものは我と寝そべる  
時間から逃れたような人集う午後の茶房に我も紛れむ

ツバメの雛 大池アザミ\*兵庫

ぎつしりとツバメの雛は巢に並び狭いだなんて言葉も知らず  
蛇がいる ツバメの雛は巢にもぐり存在を消すその静けさよ  
雛たちももう飛べるだろう胸、頭、巢からあふれてこぼれ落ちそう  
挨拶のひとつもなしに出ていったツバメ御一家置土産の糞  
新紙幣またあらわれて苦笑するタンスの奥の聖徳太子

甘 檉 丘 友田昌子\*奈良

甘檉丘の斜面にところ得てこの年も咲くササユリの花  
はつなつの真青な空に風生れて家族四人のTシャツ揺れる  
夕ぐれて子ら遊ぶ声遠ざかり手招きされる栗の花穂に  
なんとなく腰痛来そうな雨の日を近まわりして終えるウオーク  
手術後はスイバの花穂よく見えて別世界なり眼鏡よさらば

ステルス値上げ 河内妙子\*広島

九つを越してききわけ悪き孫叱りし声も大きくなりぬ

雨上がりみどりの風とはまさにこれ庭のレモンの花の香入り来  
栗の花のにおい微かに漂いて梅雨入りするもそう遠くなし  
波の音飛行機の音話し声初夏の浜辺でうとうとしたり  
詰め替えの珈琲残らずすんなりと缶に入ったりステルス値上げ  
大野英子選

夫の生家 西森恭子高知

嫁ぎきて通ひなれたる山里の夫の生れ家壊すを惜しむ  
明治より住みし先人しのびつつ夫の生家の道具に触れる  
柿若葉の照り返し受け草を引く夫の生家の庭にかがみて  
とろとろと完熟梅のジャム作り窓あけたれば正午の時報  
半夏生を一輪挿して姿よし暑さのがれて飽かず眺める

白鷺の首 尾花照子\*福岡

鉱泉のお湯につかればつくづくとみそ汁の具の豆腐のきぶん  
うすぐれの雨間をひとは白鷺の首の角度に早足で過ぐ  
ゆうしゅうな表面張力のせいでいよいよしたの水はくるしい  
ゆうやみの農葉をまく老農の軍手は徐々にしめり気を帯ぶ  
ゆうかぜの海図をもたぬ灯台へ船はときおり古歌こぼす

佐賀唐津線 白井玲子佐賀

T A Oの打つ太鼓の音が聞こえる九重くちゅうの森の水湧く地まで  
熊のぬぬ熊本阿蘇の森の中ひとりゆつたり湧水ながむ

影絵展にて「泣いた赤鬼」を最後まで見てゐる夫よ幼子のやう乗ることも無けれどつひに全駅が無人駅なり佐賀唐津線なくていい男女の格差あつていい女らしさと男らしさは

今日は控へ目 鶴田竹一 長崎

愛用のバイクに蛙が鎮座してしばし遅れる日曜のミサ腕に付く糖センサーに促され好きな焼酎今日は控へ目鉄を振る畑まで猫が迎へ来て足に擦り寄り靴に足乗す乾ききる棚田に水は放たれて砂煙上げ陣地抜げる



AIに仕事渡した女子社員セルフレジにて機械見守る

はつなつの風 春野直子 熊本

咲き初めし冬青せきよの花の小さき白 はつなつの風にゆれてはかなしファンファーレ奏でるごとく碧空を仰ぎ咲きたりノウゼンカズラさみどりの水引草の葉の間をシジミチヨウまふ朝のたまゆらたかだかと空を仰ぎてほがらかに咲く四照花よまほかし 梅雨に入りゆくコーヒーのお伴に今日はアーモンド独りになれる時間は必須

木畑 紀子選

「その二集」特選

をさなのやうに 水鳥葉子 茨城

レタスのかなしみ くだう れいん\*岩手

レタスにはレタスのかなしみもあるか折り重なった空気がと切る自動製氷機が氷落とす音 こころが割れるときもその音へ東京はこの国にいくつでもあると思う博多の駅大きくてもしかしてわたし田舎者と問えば夫は切なそうに頷く荷作りがどんだん上手くなったからいつでも逃げられる でもどこへ

麦の道 白石明男 群馬

昭和ひと柄生まれをまたも減らしめて級友二人逝きぬ今月

散策に三つのコース決めてあり五月はもつばら麦の道選る  
スーパ―は取り壊し中 表から裏の熱れ麦畑が見える  
思ひでづくり今更要らぬ齡にて記念写真の後端に立つ  
大空襲に燃える東京の夕空を畔に立ち見き疎開児われは

熊 毛 虫 浜 野 み ほ\*千葉

雨後の野にピンクのねじ花朝陽受けジュエルのごとく小さく光りぬ  
通勤の道に茶色い熊毛虫蛇に劣らず素速く動く  
棘々の赤黒縞の幼虫はパンジー食いのつまぐるひようもん  
凝視してフラメンコ舞うカルメンのごとき魅惑の赤アマリリス  
たくづの白花清き時計草(受難)のさまに曇天に咲く

ゲンジボタル 新 美 亜希子\*神奈川

だみ声を5%ほど混ぜてみよう親しみやすさをにじませていこ  
美人だつて不美人だつて下痢はする社会の圧力等しくかかる  
まさみちゃんの堂々として上品で居座る感じを私も真似たい  
天空の大きい刷毛で撫でた空 模様が出来て天気と呼ばれる  
こんな夜にゲンジボタルになるなんてよっぽどのがあったでしょう

風間 博夫選

対向車線のライト 上 野 成\*新潟

ひな四羽、等間隔に並んでる記念写真に収まるように  
右折帯二台目我はもどかしさ押しこころし待つ青信号を

ペア柄のシャツに気づきぬバラ園にふたり自撮りのスマホ覗けば  
怒り目に潤み目わらい目曇る日は対向車線のライト楽しき  
右折車のウインクのような点滅に惹かれ信号待ちもいとす

妹 の 名 桜 井 奈穂子 新潟

音もなく雪ふりしきるきさらぎの小暗き朝に妹は生まれき  
母のぬ寝寝間をいづればにこやかに「いもうとだよ」と祖母は告げたり  
習ひたる漢字ならべて妹の名を思ひあぐねる四年生われ  
妹の名に「友」の字入ると決めし日の幼きわれと母とその母  
歌よまぬ妹なれど小島ゆかり氏の語りに深くうなづきてをり

大 観 の 軸 岩 城 静 子\*富山

台風一号風速二十メートルを窓に眺めてコスモス誌読む  
コピーなれど大観の軸に替えたれば朝靄に立つ富士の気高し  
婆の日と白いケーキに畑のいちご孫と曾孫の手作り嬉し  
明け空をはばたきながら郭公鳴く闇夜に雛を見失いしか  
鳥がいつ運びし種か河原グミーメートル伸び庭に花咲く

色 に 染 ま ら ず 権 田 陽 子 静岡

ダンゴムシつつき丸めて引つ張りぬ虫愛づる君は二歳の理系女子  
携帯のアラーム音はかまびすし厨にひとつ砂時計置く  
摘みたてのサヤインゲンをポキリ折れば夏の香のするしぶきとともに  
夏掛けに替へれば軽きにとまどひぬ体は未だ春のただ中  
透きとほる雨のしづくは紫陽花の色に染まらず色をうつせり

明治座 古田輝美\*愛知

傘 増田柳子\*福岡

幼き日立ちし明治座足元のライトの光り想い顕ちたり  
幼き日学芸会は明治座なり(ベニスの商人)記憶にありぬ

級友が女形の姿の写真あり鼻筋の良く小柄が浮ぶ

楽屋裏壁に坂本竜一の文字はかつちりきつちりとあり

明治座の花道の造り試したり見得のまねして踏む音高し

小島 なお選

航空障害灯 八木 かおり 奈良

越して来し町に五軒の歯医者あり名前で決める(ここに齒科)に  
友人は特急の運転士勤め上げ夜の入庫の管理者となる

雨去りて澄み渡る夜の稜線に航空障害灯の点滅

ハンドルを持つ手の甲に紫外線強まり夏が加速して来る

夜半より止みゆく雨か折ふしに竹の葉さやぐまどろみのふち

この白は 山添 聖子\*奈良

たましいのようゆるりと浮かびたり少し弱ってきた風船は  
さみどりのホウチャクソウの花びらの重なる影に夏の始まり

詠草は東京のあと新潟へ 行間に涼しき風の吹く

消しゴムのとなりで硬き音の鳴る抜けた乳歯を子は筆箱へ

オリブの花降り積もるこの白は暖色に分類される白

花芽折れテープを巻いた薔薇の木に深紅の花咲く6月の庭  
あぜ道で戦隊ヒーローが乗りそうな田植え機に会い嬉しくなりぬ  
田植え機に乗る青年に声かけるかつこいいって元気になるわ  
女子高生日傘はささずフランス人雨傘ささず手は空けておくか  
白化米見あたらず手ざわりなめらか福岡県産「めし丸元氣つくし」

海底にキイ 江越 国弘 長崎

海底にキイ打つごとく予算組む春の職員室の夜は更けたり  
勿忘草の花の蜜雑に吸ひ気まぐれに移る蝶は吾なり

齒科衛生士に会ふたび歯磨きけなされて八十歳が保つ二十六本

リュック、靴、ズボン吊して風当てる春の散歩の後始末にて

網戸ぬけ灯に来て遊ぶカメムシ等ダニスプレーをしたか浴びぬ

重 力 前田 泰隆 長崎

かうべ垂れ地面を見る我のをり老いといふ名の重力のわざ  
運転しまはりが白く見ゆるのは白内障ぞまぶたを下ろす

下を見る習慣付きて改めんまはりは白めど青き空見ん

空を見て自転車こぐ君したを見て歩く君だいいじにな君を

「大屋根サ、昼寝コして三毛猫」一戸歌ひし津軽のオデンキ